

統合に向けた取り組み ～生活指導面の変遷～

目黒区立第五中学校・目黒区立第六中学校

1 はじめに

(1) 統合の経緯及び本主題の設定理由

目黒区教育委員会は区立中学校適正規模等検討委員会の答申を踏まえ、望ましい学校規模としては11学級以上とし、その規模の学校の実現を目指している。その中で第二・第五・第六中学校の統合が進められてきた。

1校11学級の観点からすると、今後も区立中学校の統合が予想される。そこで区内で初の統合に際し、生活指導分野で検討してきた内容・問題点をここに整理し、今後の一助にさせていただきたく、本主題を設定した。

(2) 組織について

① 教育課程等準備委員会

統合に向けた開設準備委員会を受け、区教委、担当副校長、各校から教務・生活指導を担当する教員で構成された教育課程等準備委員会で、新校の教育課程等の検討を重ねた。実際には「教室をどのように配置すべきか」といった施設面や、「特色ある学校づくりをどうするか」といった教務面のほか、「生活指導を考慮した施設・設備の要望、学校行事の検討、生徒会組織など」といった生活指導面などの多岐にわたる話し合いが進められた。

② 生活指導部関係部会

生活指導の基本方針・生活のきまり・生徒会組織・生徒手帳作成・教育相談計画・特別支援教育計画・学級編制関係・保健指導計画・給食指導計画の各部会を発足させ、各校から選出された教職員が個別に会議を設け、次年度の計画などを話し合った。

その他の細かい部分については各校の生活指導主任が適宜会議を設け、協議した内容を自校に持ち帰り、全体に諮るなどして対処した。具体的には、標準服検討部会で検討された標準服や体育着の運用面や校内履きなどについて話し合い、基本線を確認した。

2 目黒中央中学校の特色及び骨子

(1) 教科センター方式

目黒中央中学校では、教科指導のより一層の充実を目指した「教科センター方式」を採択した。教科センター方式とは、すべての教科において教科教室と教科学習エリア、教科教員コーナーを教科1カ所に整備・集約した方式である。

従来とは異なる教科センター方式を採択している学校の視察を行うなどして、配慮すべき点を話し合い、施設・設備面についての要望についてまとめた。

〈教科センター方式での生徒の動き〉

- ① 朝登校したら自分のHR（ホームルーム）へ行き、自分のロッカーに荷物を入れ、出席をとる。
 - ② 休み時間中に必要な道具を持って次の授業が行われる教室へ移動する。
 - ③ 給食は自分のHRでとる。基本的に道徳や学活もHRで受けることになる。
 - ④ 教員は職員室ではなく各教科が持つ教科教員コーナーにいて、随時生徒の質問を受ける。
- ※ 教科の連絡等は掲示板にて行う。

(2) 目黒中央中学校の教育計画骨子

- 基本理念：『自立と共生』
- 目指す学校像：望ましい学校規模を生かした「魅力と活力にあふれ、信頼される学校」
- 育てたい生徒像：基本的なルールを身に付け、良い意味で切磋琢磨し、進んで心身を鍛える生徒

これを受け、生活指導の基本的な考え方は各校の実態をもとに「生徒の自主性」を軸に検討を進めた。

3 主な問題点とそれに対する検討内容

(1) 校舎設計

「教科センター方式」を効果的に実現するために話し合った内容は、

- ① 対面教室の問題点 → 壁がなく互いが見える状況であると授業に集中できない可能性がある。
- ② 可動式の間仕切りの防音性 → 利便性もあるが、音の漏れによる障害もある。
- ③ HRの広さと位置 → ロッカーの大きさや、掲示板の確保も重要である。
- ④ ベランダの危険性 → 避難経路にもなるが、日常における生徒の安全面確保と所在確認が難しい。
- ⑤ 更衣室の広さと位置 → 各学年の専用更衣室があった方が望ましい。
- ⑥ トイレの広さと位置 → 男子より女子のトイレを広いスペースにした方がよいのでは。
- ⑦ 階段を含めた動線の確保 → 頻繁に行われる移動がスムーズに行えるか。
- ⑧ ランチルーム → 多目的に活用でき、給食指導の面からもよいが、場所の確保が難しい。
- ⑨ 共通教室 → 学年集会や学年の学習発表会などにも使えて便利である。
- ⑩ 特別支援教室 → 他の生徒からあまり離れすぎない場所がよいなどである。

(2) 学校生活のきまり

3校の「指導方針」や「生活のきまり」（生徒手帳）を持ち寄り、内容を比較した。細かい部分においては異なる点もあったが、ほぼ同じような内容として捉えることができた。そこで、六中校舎が新校立ち上げの2年間使用されることから、六中の「学校生活のきまり」をベースに作成した。その他の話し合いの内容は、

- ① H18年度の生徒手帳は作成しないが、身分証明書は作成する。
- ② H18年度は別紙で「学校生活のきまり」を発行し、共通理解を図るとともに新校に適した内容に随時改訂し、生徒手帳作成を進めることとした。

(3) 標準服

標準服検討部会の話し合いを受けてその運用面について考えた。話し合った内容は、

① ポロシャツの着用

夏服時にシャツの代わりとして、白無地のポロシャツを着用してもよいとした。

② ベストの着用

現在ブレザー着用の六中では、冬服時は防寒着としてセーター・ベストが認められている。夏服時は認めていないが、学校指定のベストなら女子のみ着用してもよいことになっている。このベストは入学時に購入してもしなくてもよいことになっているが、現実的には下着が透けるということから、ほぼ全員の女子が着用している。これらのことから入学

時に女子のみ指定のベストを購入し、夏服時に着用することとした。(開校時の2・3年生の標準服及び体育着は区より支給)

③ 校章・クラス章

校章については、ブレザーの左襟に付けることとし、クラス章については、クラス数が少ないことや金額面のことなどを考慮し、H18年度は着用しないこととした。ただし今後クラス数の増加など必要性が発生した場合は、その時に考えていくこととした。

(4) 生徒会役員の立ち上げ

生徒会役員については現在の役員を決める前(夏休み前)に、各校の役員をそのまま合わせた形の、五中より5名・六中より5名の計10名で新校役員を構成するとともに、会長が2名いる状態で活動することを確認した。(二中は在校生が1名で役員会が既にないため)

(5) 生徒会規約・生徒会選挙規約

生徒会規約及び生徒会会則についても、3校で照らし合わせ作成した。新校の基本理念である「自立と共生」の観点から初代役員で作成していくことが望ましいと考えた。ただし、委員会については4月当初より活動する必要があることから、予想されるクラスの人数や教員数を考慮し、委員会数や委員会のネーミングを設定した。設定した委員会は以下のとおりである。

委員会名	定数	関連委員会	備考
学級委員会	男女各1名/クラス	学級・中央委員会	
環境委員会	男女各1名/クラス	風紀・整備委員会	週番・清掃活動
公共委員会	男女各1名/クラス	図書・体育委員会	貸し出し・サービス提供
保健給食委員会	男女各1名/クラス	保健・給食委員会	衛生活動
報道委員会	男女各1名/クラス	放送・広報委員会	放送・生徒会誌
生徒会役員	1・2年より5～6名		

H18年度の各種委員会は各クラスから選出するが、H19年度以降は生徒の自主性を育むために、自主的委員会制度(視察校の大洗南中学校で実施)や新校の現状も視野に入れて、生徒会役員・教員で検討し委員会を設定していくこととする。

(6) 六中ABC

新校になり教職員の大幅な異動が考えられることや2年間は六中校舎を使用することから、六中で現在使用されている「六中ABC」をたたき台とし、開校後も不都合があれば随時改訂し、教職員間の共通理解を図り、教育活動を円滑に進めるものとする。六中ABCとは教務や生活指導での教職員間のきまり・原則・方法・ルールなどが明記されているものである。

(7) 部活動

部活動については、教育課程外の位置づけのため、各委員会でも取り上げられにくいいため、話が進展しづらく問題点も多くある。問題点としては、生徒数としては適正規模内の人数だが、3校を統合することにより部活数が増加(基本的には各校の既存の部活動を存続させると考える)、部ごとの人数の減少・活動日の減少や活動場所(校庭・体育館)の確保などが考えられる。また教員の異動により、存続はもちろん現在と同じ活動ができなくなる部も出てくるのが考えられる。

次に、合同部活を実施し、統合前から一つの部として活動した例を述べる。合同部活が可能になった理由としては、

- ① 1校が人数の減少によりチームが組めなくなった。
- ② 両校の顧問が生活指導主任で新校の教育課程等準備委員会のメンバーであった。

③ 外部指導員が監督を務め、それぞれの学校へ出向き指導することが可能だった。

などが挙げられ、合同練習開始前に準備したことは、

- ① 保護者会やプリントを作成し説明をした。
- ② 保護者に同意書へ記入し提出してもらった。
- ③ 五中・六中の学区域付近の地図を作成し活動参加時の通学路を提出してもらった。
- ④ 安全面を考え「生徒理解のための資料」を作成し提出してもらった。などである。

また、必要性に応じて合同部活開始後行ったことは、公式戦へ出場のためのユニホームの準備（五中・六中名入りのもの、保護者負担）。ブロック大会優勝後、都大会出場のために中体連との協議、働きかけ。（統合の前々年度秋からの活動のため）などである。しかし、今後の課題として、校名が目黒中央中学校になることから、再び新しい校名入りのユニホームを準備しなくてはならない状況にある。

平成17年度の初めには五中と六中の既存の部活動への部員募集を各校で呼びかけるなどの働きかけも行い、スムーズに移行できるよう工夫した。しかし、平成18年度以降については、これまでの経緯や顧問、活動日等の問題を踏まえた上で、どの部活動をいつから発足し、部員募集をどのように行うのかについて改めて具体的な検討が必要である。

<詳細は「目黒区立中学校における合同部活動の実施ならびに外部顧問指導員等の設置について」に参照>

4 モデル（教科センター方式）校の視察から

《港区立六本木中学校》

- (1) 避難経路としてベランダがあったが、生徒が自由に出入りし、所在の確認が難しいようだ。
- (2) ランチルームは学年集会など様々な用途で使えて便利である。
- (3) 学級の基盤であるHRは広い方が使い勝手がよく、クラスへの帰属意識も高まりやすい。

《茨城県大洗市立大洗南中学校》

- (1) ノーチャイムを導入していたが、授業遅れなどの混乱はなかった。（最初の指導の徹底）
- (2) 毎年生徒が必要な委員会を話し合い、委員会を発足させることで生徒が主体的に活動する。
- (3) 生徒が開校前から学校づくりに参画し、生徒の希望を取り入れることで自主性を高めた。

5 まとめと今後の課題

統合に向けては、どの問題をどの程度決めておけばよいのかわからず、暗中模索で少しずつ進めてきた状況である。教育計画の作成に始まり、学級編制の問題や校舎移転に伴う引っ越しの問題など、検討課題は多種多様である。

既に統合が行われた他区の学校の様子を聞くと、まず「教職員間の共通理解をどう図るか」が最大の課題となったとのことである。生徒が不安になったりすることのないよう、早い段階で教職員の共通認識を確立させたい。まずは生徒が安心して楽しく学べる環境を作るために学校・家庭・地域が知恵を出しながら、よりよい環境を整備していく必要がある。

今回『教科センター方式』という新しいチャレンジをするにあたり、区や区民の期待は大きなものがある。まずは教員が生徒のことを第一に考え、常に前向きに取り組んでいく姿勢が求められる。